
玻璃と意図 彼岸堂図書館目録

依田一馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

玻璃と意図 彼岸堂図書館目録

【Nコード】

N9743N

【作者名】

依田一馬

【あらすじ】

人の『不幸』に関わった本しか受け入れない。そんな図書館をあなたはご存じだろうか？

私設図書館の専属司書である創平は、言霊を喰らう妖怪「詞喰鬼」である円と日々業務に明け暮れている。

ある日、創平が所属する財団から一通の手紙が届いた。なんでも、今は亡きミステリ作家の遺作を預かってほしいそうだが……？

世の中には不思議と名のつくものが多すぎる。

そもそも、この世に存在している人間の中で、『鬼』に思考の一切を喰われるという奇妙な感覚を知っている人数とやらは一体どの程度なのか。

彼・帷子創平は、己に覆いかぶさり食事を貪る男 『鬼』についてぼんやりと思索する。

彼の瞳に映る『鬼』は、何かの物語で読んだ鬼とは大分形状が異なる。どこからどう見ても、顔立ちがやたら整っていることを除けば人間の男とさほど変わりないし、やや長い黒髪も特別目立つものではない。唯一変わっていると思うのは、その赤みを帯びた瞳の色、だろうか。

しかし、そんななりをしていても、彼の『食事』の時だけは『鬼』だと実感せざるを得ないのだ。

何せ、この『鬼』の食欲は底なしだ。

不鮮明な意識の向こうで、独特の赤みを帯びた瞳が爛々とこちらを見下ろしている。その視線だけで、創平は己の思考全てを見透かされているような気持ちになる。否、現実に見透かされている最中なのだが、そんな間違いすらも気付かないほどに、彼の思考は鈍っていた。頭の中からつま先まで舐めつくすように、じつとりと丹念に見つめる赤の瞳。視線に耐えきれず文句を言おうとすると、この『鬼』は創平のことを愛おしげに見つめながら、頭を撫でてくる。何も言ってくれるなと言わんばかりの手つきで。

その間も創平の頭に浮かんだ言葉が容赦なく「喰われて」ゆく。その感覚は快楽と酷似しているが、それよりもはるかに強烈だ。今見ているものも、鮮烈な感覚も、ほんの数分前の記憶すらも、言葉に置き換えてしまえばすぐにこの『鬼』に喰われてしまう。言霊は魂だと言ったものだ。今の創平はまさに、魂が喰われたことに

より完全に力が抜けてしまい、もうなにも考えられなくなっている状態だ。

辛うじて細く長い息を吐き出すと、ようやくこの『鬼』は満足し
たらしい。呆けた表情の創平に優しくにこりと微笑むと、たった一
言、

「ごちそうさまでした」

と声をかける。その声を合図に、創平は現実へと引き戻されるの
だった。

創平はふうつと息を洩らしつつ、そのまま革のソファに身を沈め
た。まったく、嫌な汗をかいたものだ。激しい倦怠感と同時に襲い
かかる睡魔。それに完全に支配される前にと、彼は今まで己を組み
敷いていた、そして今もこちらをじつと見下ろし続ける『鬼』を睨
めつけた。

「喰いすぎ」

悪態すらも、この『鬼』には通用しない。その証拠に、彼はその
優しい眼差しのまま創平の頭を撫で、

「だって創平の言霊は、すごく美味しいから。根本的な部分で言葉
がきれいな日本人って、実は貴重なんだぞ」

と、彼にしては珍しい賛辞を並べている。

そう言われてしまつては、たとえそれがご機嫌とりだと分かつて
はいてもきつく叱りつけることはできない。創平は「やられた」と
内心思いながらも、己の頬にかかる『鬼』の、やや長い黒髪を右手
で払いのけたのだった。

「それにしても、今日の文章はなんだ？ やたら古くさい味がした
が」

「あー……そりゃあ、昨日まで整理していた古典の一部だろうな。
棚番十二のところに入れておいたやつ。つーか、お前それを喰った
のか。やめてくれ、あの本の整理はまだ完了していない」

喰ってしまったものは仕方がないだろう、と『鬼』は吐き捨てる
ように言い、そっと創平から身体を離れた。よほど満腹になってし

まったのか、眠たそうに欠伸をしながら身体を大きく伸ばしている。そのたびに彼独特の後ろで一つに束ねた黒く長い髪が左右に揺れていた。結局のところ、本日も彼にいいようにされてしまったのが悔しくてしょうがない。昨日の仕事も台無しにされてしまった。まあ、今更悔やんでもどうしようもないけれど。

創平はまだだるく重い身体を無理に動かそうとは思わなかったの
で、仰向けの体勢のまま上機嫌な『鬼』の背中に声を投げかけた。
円、と。まどか

「それで？ 今日はどうくらい届くんだ。『例のもの』は」

「うん？ ああ、今日は三箱くらいかな。そもそもそんな物騒なもの、毎日届く方がおかしいだろう」

それもそうだ。

全うな意見をまさかこの『鬼』の口から聞くことになるうとはこれっぽっちも思っていなかった創平は、何も言えずただ口をつぐむばかりだった。そんな彼を一瞥しつつ、『鬼』はにやりと不敵に笑う。

「まあ、俺はお前さえいればそれでいい。案ずるな、ひがんどいつ彼岸堂専属司書・帷子創平君」

十

創平が司書として勤める「ひがんどいつ彼岸堂図書館」は、あしだ芦田財団が管理する私設図書館である。

郊外に建設された明治洋館風の建物は常に手が行き届いており、まるでそこだけ過去へタイムスリップしてしまったかのようなのである。窓の上部にはステンドグラスがはめこまれたファンライト（半円形の、日本でいう欄間のこと）があり、外壁は白い色の木造漆喰塗。正統派と評するべきその素晴らしい外観は、創平が気に入っているところのひとつでもある。

そんな彼岸堂図書館、実はなかなか特殊な場所である。

まず、蔵書は全て禁帯出であること。それから、この場所に持ち込まれた本の全てが必ず所蔵されるとは限らない、ということ。裏を返せば、一旦この図書館に所蔵されることが決定してしまえば、その本はおそらく永遠に外へ出ることはない、ということだ。

そして、何よりも一番変わっているのは

人の『不幸』に関わった本しか受け入れない、ということである。その話を初めて聞いた時、能天気を自負する創平でさえも思わず目を瞠り、「一体どうして」と当時の担当職員を問い詰めていた。よりによって人の不幸だなんて。どうしてそんな不可解なものばかりを集めているのだらう。いくら私設図書館といえども、それは最早狂気の領域だ。

しかし、その理由はすぐに思い知らされることになる。

実はこの彼岸堂図書館には、古くから　それこそ、開設当初から『鬼』・^{まどか}円が住みついていたのだ。

円という名前は、実は便宜上創平がつけた名前で、本来の名は「^{しさんき}詞喰鬼」という。詞喰鬼とは字の如く「言葉を食らう鬼」。例えば本や新聞、人と交わす些細な言葉でもいい。そういった『言霊』を喰らうことで生命維持を図る妖怪なのだそうだ。

円曰く、「詞喰鬼」は割と美食家が多く、好みも様々だという。

とびきり洗練された純文学を好む鬼もいれば、漢詩が好きだという鬼もいる。人間の噂話を好む鬼もいれば、小難しい体系書を好む鬼もいる。円自身は『不幸』が混ざった文章が好みだそうで、必然的にこの図書館はそういった本ばかりを集めるようになっていたらしい。

ところで、その円が不幸にまみれた本よりも気に入ってしまった「お気に入り」がいる。それが、現在の「彼岸堂」専属司書・創平だ。元来創平は本好きで、幼少の頃から「本の虫」と呼ばれるほどにありとあらゆる本を読み漁っていた。長年培ってきた語感が、円のお眼鏡に適ったという訳だ。

円が言うには、創平が発する些細な言葉、ほんのわずかな思考で

も、ひとつひとつに生きた「味」がするのだそうだ。同時に「最近の言葉は美味しくない」とぼやくこともしばしばで、どれだけ現代人の言葉が空虚なものであるかがい思い知らされる。つまり、円に言わせれば創平は恰好の獲物なのだった。

そうは言っても、毎日頭の中を覗かれたんじゃあ、たまったもんじゃないよなあ……。

創平はぼんやりとそう思う。

人間が毎日食事をするように、詞喰鬼も食事をする。円の腹を満たすためとはいえ、いちいち創平の頭の中を覗いては美味しそうな部分をかつさらってゆくのは体力的に無理があるのである。何せ、詞喰鬼が人の脳内から言霊を喰らうとき、喰られる側の人間には表現し難い強烈な快感に襲われるのだ。創平は完全なるインドア体質故に、おそらく標準的な男性よりも体力がない。だから、毎回毎回こつもがつつかれると正直疲れるのである。

さて、結局睡魔に負けてそのままうたた寝をしていた創平だったが、扉の閉まる音で目が覚めた。瞳だけを動かし様子を窺うと、どうやら円が宅配の荷物を受け取ってきたところらしい。彼の手には中位の箱がいくつか積まれていた。

「円。届いたのか？」

「まあな」

それらを適当に床に置き、ベリベリと豪快にガムテープをはがす。案の定、どの箱の中にもこれでもかというくらいに本が詰められており、正直よくこの量を一気に持つことができたなあ、と思う。まあ、詞喰鬼は人間よりも力持ちなので当然と言ったらそれまでなのだが。

円はその中から一冊ずつ丁寧に本を拾い上げ、じっと見つめては己の横へと積み上げていった。時折開いて適当に頁をめくることもあったが、それもすぐにやめて同じ山へと積み上げてゆく。

円は、所謂ティスティングをしているのである。この図書館にふさわしいほどの『不幸』が詰まった本を探し出し、それ以外は別の

詞喰鬼へと横流しする。それが彼ら独自のルールだった。

「おいしそうな、あつたか」

声をかけると、円は否と首を振る。

「どれもまずそうだ。まず匂いがしない。開いてみても『これは』
つてもものがない。うーん、最近の人間どもは、脳内が春なのか？
それとも本を読まないのか？」

「どちらも有り得る」

困ったな、と創平は思う。ここで彼のお眼鏡に適うものがなければ、必然的に捕食対象が自分へと向けられてしまうではないか。それは困る、非常に困る。ふう、と長くため息をついていると、円が怪訝そうな表情で創平を見つめていた。

「創平。俺に喰われるのがそんなに嫌か」

「嫌とかそういう話でなく。お前は飽きないのか。毎日同じ味のものばかり喰って。そっちに積み上げているまずそうなものでも、もしかしたら食わず嫌いかもしれないじゃないか」

「うーん」

それはないかな、と円は言う。「こっちに積んでいるのは俺の好みの話じゃない。根本的になにか違うつてこと。そうだなー、お前が時々作っているマフィン？　だっけ？　あれが醤油味に変わっているようなもので、どこか壊れた味じゃないの」

醤油味のマフィンは確かに嫌かもしれない。

なんとなく納得して、ようやく創平も身体を起こす。そして胡坐をかいている円の横までやってきて、そびえたつ本の山から適当に一冊取り出した。

それは普通の、どこにでも売っているような昆虫図鑑だった。めくってみると、裏表紙にはご丁寧にマジックで名前が書かれている。きつと前の持ち主が書いたものだろう。

「これはどう？」

「それは特にまずそうだ」

そうですか、あなたは相当な美食家ですねと創平は肩を落として

いる。何と言うか、もう諦めるしかなさそうだ。

「人の『不幸』は蜜の味、って言うじゃないか。人間たちは」

「うん、表現としては間違っていないけど、それをあんたが言うの？」

結局、「これ」という本がなかったので、山積みになれた本は再梱包し別の詞喰鬼の元へ送られることとなった。創平は円以外の詞喰鬼に会ったことがないので、それがどういう経路で流通しているのか全く想像がつかない。だが、箱の山と共に出かけ、戻ってきた円が「送ってきた」と言っているの、まあ特別心配する必要はなさそうだ。

「ああ、お疲れ様。重かったろう」

「詞喰鬼は意外と力持ちなんですよ、創平君。……あ、そうだ。これ」

ふと何かを思い出したらしい円が、きょとんとしている創平に通の手紙を渡してきた。

「お仕事だ。ご丁寧に、芦田財団が転送してきやがった」

「あしだ芦田財団が？」

そうへい まごか創平は円に突きつけられた手紙を受け取ると、裏表を返ししながらその宛名を確認する。確かに、使用されている封筒には芦田財団のエンブレムが入っているし、シーリングも今時非常に珍しい赤の蠟留によるものだ。この習慣は「彼岸堂」の創設者であるあしだたんじゅうろう芦田團十郎から続くもので、今も芦田財団の幹部を中心としてそれを保守する傾向にある。

今回も決して例外ではない。正式な形で送付されたということは、それなりの事情があるということだ。多少げんなりとしつつ、創平は自分が仕事用に使っているデスクの上から銕を探りだした。

「まあ、怪しいものじゃないといいけれど」

「あいつらが怪しくない手紙を書いてきたことがあったか？ いいや、ないね。そもそも芦田のじいさんからして、怪しさ満載だったじゃねえか」

「円。あいにくだけど、おれ、芦田氏のことは分からないよ。大体にして、芦田氏の現役時代にはまだ生まれてもいないよ……ああでも、怪しい手紙云々は太いに賛成する」

さて、そんな雑談を繰り広げながら封筒の上部を銕で切り取った。銕はいつものように、元の場所に戻しておく。創平は、こういうところでは非常に几帳面なのである。

開封された封筒の中には財団で書いたものらしい便箋が一枚と、何故かもう一通茶封筒が入っている。まず先に、と三つ折りにされた便箋を開き、数秒後創平は大きくため息をついた。

「どうした」

「いや、出張のお達しだ」

正しくは、出張買取だろうか。「円、お前はどつする？ 別に遠くに行く訳じゃないから、一日で戻るけど」

円はうつん、と唸り声を上げながら、一体どうするべきかと悩んでいる。一日で戻ってくるならば別に留守番していてもいいのだが（というか、彼はそれが普通だと思っ**て**はいるのだ）一旦出張に出かけるとなにかしらのトラブルに巻き込まれるのが創平だ。本人に自覚がないのが、また罪作りなところである。

しかし、今回は少しくらい創平を信じてやってもいいだろうか。円がそう思ったとき、なにやら思い出したように創平が声を上げる。「ああ、でも途中で篠宮^{しのみや}さんに報告書を出してくるから、もう少し遅くなるかもしれない」

その篠宮という単語に、円が過剰反応した。がばりと立ち上がったかと思えば、創平の両肩をがっちりと掴んだ。

「あの男は駄目だ」

「え、どうして」

きょんとする創平に、噛みつく勢いで円がまくし立てる。

「あれはなかなかに怪しい。どうしてお前はひよいひよいとそういう奴についていこうとするんだ」

篠宮は司書部門の長で、創平の上司にあたる。以前この図書館の専属司書をやっていたこともあるのだが、いかんせんこの円と馬が合わなかったようで、配属変更の最短記録保持者としても名を馳せている人物である。円が過剰反応するのはおそらく単純に嫌いだからだろうが、だからといって報告を怠るのはよくない。基本的に、買い取り関係の報告は直接行**う**のが常なのだ。

仕方ないだろ、と宥めるも、円は完全に拗ねてしまったらしい。

「携帯電話を使えばいいだろうが！ 文明の利器は相応に利用しろ！」

「じゃあ一緒に来いよ、おれを監視したいんだろ。お前の目利きも必要だし、ちようどいいじゃないか」

そう言われてしまうと、さすがの円も何も言えなくなり、ぐっと押し黙るしかできなくなる。

当の創平はと言えば、

「蔵でも開けるのかな」

と呑気に呟きながら、もう一つの封筒を開け始めていた。財団からの手紙の文脈からすると、おそらくこちらが依頼主の手紙なのだろう。面白い本があるといいなあ、とこれまた能天気な一言も付け加えながら。

その呟きに、思わず円は非常に残念そうに創平を見つめてしまった。今更何を言っているんだ、とても言いたげな表情である。

「帷子創平君。うちの図書館は面白い本なんか置かないでしょう」

「そりゃあそうだ」

創平は額に手を当て、「血なまぐさい話でなければいいが」

「俺としてはそっちの方が嬉しいけど。で、なんて？」

ああ、と創平が渋々茶封筒から白い便箋を取り出し、丁寧に三つ折りにされたそれを開いた。便箋に並ぶは、非常に整った美しい文字。円の好物の類だな、と創平はぼんやりと思う。

「創平。それ、あとで喰わせてくれるか」

案の定爛々とした瞳で尋ねてきたので、創平は聞き流す意味を込めて曖昧に頷いた。どうせ、答えは「はい」と「うん」と「イエス」、または「ヤ」とか「ウイ」とか、まあそういう類の答えしか存在しないのだ。何を言っても答えが同じならば、別に返事などする必要はない。

しばらく依頼主からの手紙を眺めていた創平だったが、最後に記されていた名前に何かを察したらしく、ぴくりと眉の端を震わせた。そして何やら真剣な面持ちで、便箋を畳む。

「円。大物が釣れたぞ」

ほお、と円はにやりと笑う。創平がこの手の反応をしているときは、彼が想定している以上のものが待ちかまえている可能性が高い。だから期待の意味を込め、このように言っておいた。

「それはどれだけ、美味しいのでしょうか？ 創平君」

車を走らせること二時間。創平と円が向かった先は、手紙の差出人である某の邸宅だった。手紙の文面を見た段階で薄々感づいてはいたが、どうやら件の依頼人は旧家の出らしい。その証拠にやたら広い瓦屋根の屋敷がどんと鎮座していた。彼岸堂も似たようなものだが、これはすごいと創平は思わず口を開け広げていた。

「ここで……間違いないよな」

手紙の宛名を何度も確認し、緊張をほぐそうと数回深呼吸する。そんな創平の横で、円がのんびりと大あくびをかましていた。実はこの円、彼岸堂以外の場所では姿を隠している。「彼岸堂」関係者のごく一部には視えているのだが（勿論、創平は視える側の人間だ）、それ以外はほぼ間違いない姿を捉えることはない。存在すら気がつかないだろう。だからと言って、こんなにだらだらとされるとこちらまで脱力してしまうのだが。勿論悪い意味で。

「そんなに緊張する相手なのか」

やる気のなさそうな声を上げる円の横で、創平は深く長い溜息をつきながら眉間に手を当てた。連れてきたのは失敗だったろうかと声にならない声が頭の中を駆け巡っている。

「ああ。今回の依頼が ふじためひと あの手田為人の遺品を預かってほしい、というものだからな」

「手田？ 誰だそれは」

知らないのか、と尋ねると、円は首を縦に動かした。そうだ、そもそもこの『鬼』は俗世に興味がないクチの妖怪だ。やはり世間知らずは、現代に生きる妖怪としても非常によろしくないのではないか。それなりにモノは教えてやらなくては、と心に強く誓った瞬間だった。

「手田為人は、その線では大御所扱いされている有名ミステリ作家だ」

「ミステリ？」

「金字塔を打ち建てたとでも言うべきか……。おれも学生の頃に相

当読んだけど、あれはすごかったな。誰もあんなことは考えないだろう。彼の亡き今、唯一である彼すらもないのだから、まあ、当然か」

ふうん、と円は心底興味がなさそうだった。興味がなければそれでいい。この鬼が興味を持つのは、どうせ本の『内容』ではない。その本にまつわる『不幸』だけだ。『不幸』そのものが彼の動力源であり、それ以上になることはない。それだけの話だ。

その件については既に諦めがついている。ここで深く追求する理由もないので、創平はこの話題を早々に打ち切った。それよりも今は、失礼のないように気を配るべきだ。

「円、ネクタイ曲がつてない？」

「あー、ネクタイは大丈夫だが、徽章が曲がつている」

しばらくぶりにスーツを引っ張り出してきたと思ったら。よほど自信がないのか、創平は朝からずっとこんな調子である。いつもはこれほどまでに取り乱したりしないので、その藤田とやらは創平の中でかなりのウェイトを維持する人物なのだろう。

「よし。行くぞ」

ようやく本人が納得したようなので、円もそれ以上何も言わなかった。

創平が門を叩くと、使用人と思われる老婦人が姿を現した。事情を話してみると「はい、はい、存じております」と穏やかに微笑みながら通してくれた。勿論、その会話は全て創平にのみ向けられたものだ。彼女にも、他の人と同様に円の姿は見えないのだ。それを改めて認識し、安心した様子で創平は屋敷の中へと入っていったのだった。

彼らが通された客間は、やや小さめの和室だった。高さの低い机に、藤色の座布団が引いてある。優美な掛け軸の前には季節の花が生けられており、広く開け放たれた戸からは美しい庭がまるで絵画のように広がっていた。

創平は件の差出人を正座で待ちながら、スーツの襟割りに触れた。

まだ先程直してから時間が経っていないので、さほど着崩れてはいない。隣の円が「まだ気にしているのか」と呆れ顔を浮かべるほどだ。それを完全に無視しつつ、続いてタイに指を移し、静かに締め直す。

「随分きれいな仕草ですこと」

そのときだった、突然声をかけられたのは。創平ははつとして、声の主を探す。

「驚かせてしまつて申し訳ありません」

襖の奥から現れたのは、黒髪を後ろで結い上げた女性だった。

「ええと……彼岸堂図書館の方ですね？ 大変お待たせ致しました。私、お手紙を差し上げました藤田幸乃と申します」

年齢は三十代中頃、だろうか？ 浅黄色の美しい文様が描かれた和服を身に纏い、その穏やかな仕草から教養の高さが見て取れる。

創平とは大分歳も離れているはずなのに、ぼんやりと「ああ、こういう女性は素敵だなあ」と思ってしまうほどに。にこりと微笑みながら、彼女 幸乃は創平の鳶色の瞳を見つめたのだった。

「はじめまして。私、わたくし芦田財団・彼岸堂図書館管理課の帷子創平と申します」

創平はカード・ケースから自分の名刺を取り出し、どうぞと彼女に渡す。

「帷子さん……ですか」

変わった名前、と彼女は呟く。

「よく言われます」

苦笑しながらも、創平は己の短い黒髪を掻いた。緊張している時の癖である。それをよく知っている円は、またやってるよと言わんばかりに横でにやついている。あとでどついてやろうと、創平は心からそう思っただった。

そうしていると、ふと幸乃の視線が円に移った。

「あの……？」

心臓が跳ねた。まさか、彼女には円のことが視えているのだろうか

か？ 否、そんなはずはあるまい。しかし、しばらくじつと円のこ
とを見つめた彼女は、

「……いいえ、なんでも。どうかお気になさらずに」

と創平へと視線を戻したのだった。円のすっかり動揺してしまっ
た表情があまりにおかしくて、創平は必死に笑いを堪えている。だ
が、いつまでも笑っている訳にはいけないので、ひとつ咳払いをし
た後ようやく創平は話を切り出した。

「それでは……、早速本題に入りますが。為人氏の遺品を預かって
ほしい、というのは」

ええ、と幸乃は頷く。

「どうしても、この家に置いておくことのできないものがあるので
す。だからといって、物が物だけに処分することもできません。そ
こで、できることならば大事にしていただけの方にお譲りしようか
と……」

「当館のことは、ご存じなのですね？」

ええ、と幸乃は頷いた。

「『不幸』にまつわる本のみを集める図書館。正直なところ、本当
にそんな図書館があるのだろうかと疑っておりました。けれど、も
しも本当にあるのなら、……これほどの『不幸』を背負った本には
ふさわしい場所なのだろうと。そう思ったのです」

「一度所蔵されてしまえば、もう二度と外に出すことはできません
よ」

創平の言葉に、彼女はふつと息を吐き出した。そして、ゆっくり
と首を縦に動かした。その動きには、微かな決意のようなものが滲
んでいる。きつと彼女は、この決断を下すのに相当な時間を要した
はずだ。

「存じ上げております。それでも『あれ』は、この場所にはあ
つてはならない」

そこまで言われてしまえば、こちらとしても確認しない訳にはい
かない。創平は彼女に、『それ』を見せてもらえないか尋ねた。勿

論ですと彼女は頷き、一緒に持つてきていた桐の箱を創平の前に置く。その箱は封をするために、藤色の房が付いた紐で硬く結ばれていた。彼女はその紐をゆっくりと解き、蓋をゆっくりと開ける。

「あなた方に預かって頂きたいのは、こちらですわ」

彼女の白い手が、中身を取り出す。その中身は、創平が想定していたものとは全く別のものだった。勿論、その横にいた円さえも。二人はただただ目を見開いて、『それ』を観察するしかできなかった。

簡単に言うならば、『それ』は蒔絵だった。鉛や錫、金箔といったものがふんだんに使われた百科事典ほどの大きさの箱。ただしそれは通常の蒔絵ではなかった。基本となる素材が、漆ではなく『硝子』なのだ。実際に硝子で箱を作る作家はいるが、実物を見たのは今回が初めてである。

その優美な箱に見とれながら、創平は絞り出すように言葉を発した。

「琳派……ですね。素晴らしい」

しげしげと眺めながら、創平が呟く。「しかし、我々は図書館を運営する財団です。箱をお預かりする訳には」

そうなのだ。確かにこの箱は素晴らしい。だが、それだけではない。なにせ、「彼岸堂」は博物館ではない。図書館だ。もしも彼岸堂が博物館だったとしたら、創平はすぐさま買い取りの手続きを行っただろう。だが、それが本だと確認の取れない以上、どうしようもない。

しかし、幸乃は首を横に振る。

「『箱』は、ただの装丁ですの」

創平ははっと目を瞠った。彼女の語調が突然鋭くなったのに気が付いたからだ。

「これが為人の遺作 最期の謎かけを具現化した作品『はじ璃と意図』でございます」

「はりと、いと　？」

創平が思わず口にしたその一言は、幸乃に一体どういう意味で理解されたのかは皆目見当がつかない。ただ、彼女はその端正とも言える表情をより引き締め、強い語調で言葉を吐き出すのである。忌々しさが時折垣間見える、凜とした声が彼らの脳を叩く。

「ええ。これが唯一、この家に置いてはいけない作品なのです」

何故、と尋ねると、彼女の白く長い指が硝子の箱を撫ぜ、するりと滑り落ちてゆく。口調とは裏腹な、愛おしさを含んだ触り方。だから創平はおや、と思ったのだ。

どちらかが、彼女の本心ではない。それを見極めるには、まだ時間がかかる。だから創平は、横でにやついている円を完全に無視して彼女に質問を投げかけたのだ。

伏し目がちだった幸乃が、ゆっくりと口を開く。そして囁くような口調で。

「何故って、」

風の音。木の葉が叩きつけられる。

翻る。そして、落ちる。

「それは私のためのものではないから」

一瞬垣間見えた彼女の表情。妖艶とも取れる含み笑い。その表情が、なんとも美しい。喪に服する女は綺麗だというのが、それは本当なのだなあ、と創平は頭の片隅で考えている。否、語法としてはおそらく間違っているのだろうが、彼女の今の美しさは間違いなく、為人氏の逝去が生み出したものだ。どうでもいいことを真面目な会話をしている時に考えてしまう、これが創平のよくない癖だった。

彼女は続ける。

「私が正妻から為人を奪った、ということはご存じ？」

確かに、為人氏は一度同年の女性と結婚していた。この幸乃は二番目の妻で、為人より一回りも年下である。あまりの歳の差に、とある週刊誌では『愛人が本妻から寝とったのではないか』とまことしやかに噂されていた。噂はあくまで噂だ。創平はまさか、と首を振る。

「冗談でしょう？ それはこちらの勝手な憶測で」

「あら。嘘か本当かなんて、第三者からでは判別できないでしょう？」

幸乃は微笑む。「ああ見えて、為人は女にだらしないところがあつたから 私が言えることではありませんが、ね」

「もし仮にそうだとして。それとこれとは話が別でしょう」

「いいえ。……この本が持つ最大の不幸は、これが『為人が前妻のために書いた本』、ということですから」

ぴくりと創平の肩が震える。その真意は言われなくともしつかりと理解できた。彼女の言わんとすることは、ただひとつだ。

「遺言、ですか」

幸乃は、ゆつくりと首を縦に動かした。

「『これは本邸に置いてはならない。幸乃に見せてもいけない。速やかに相応の手段で処分すること』」

それがこの本に対する遺言です、と彼女は言い、そして目を伏せた。あとは創平に判断を委ねるつもりでいるようだ。

当の創平はしばらく黙りこみ、坦々と思考を巡らせていた。彼独特の黒い眼差しが、じつと硝子の箱を見つめている。漆のような茶がかつた光を、くまなく舐め尽くすかのように。時折戸を叩きつける木の葉の音が微かにこの部屋の空気までも揺らしている。完璧な沈黙ではないことに、少なからず創平は感謝していた。

「分かりました。審査しましょう」

創平の判断は、「可」だったらしい。だが、本の所蔵に対する彼

の権限というのは微々たるもの。最終判断は全て円が下す。彼が「可」と言えばその通りに。「否」と言えば、彼女には諦めてもらうしかない。これが『彼岸堂』における最大の決まりごとだ。後にも先にも、これに逆らう者は誰ひとりいないはずだ。勿論、創平も然り。

幸乃に審査は非公開である旨を告げ、退室してもらった。十五分経ったならば再び戻ってくるように告げると、心なしか彼女の表情は初めて会った時よりも曇って見えた。

そりゃあ、怪しいか。

襖が完全に閉まったのを確認してから、創平は己の横でひたすらぐうたらしていた主に声をかける。今も円は、人前とは思えないほど緩んだ態度でそこにいた。寝そべっていない分まだが、これにはほとほと困ったものだ。呆れを通り越して逆に感心してしまう。

「円」

「……ああ。話を聞く限りでは悪くなさそうだ。だが」

円が硝子の箱に軽く触れ、ふっと息を吐き出す。「この箱が“俺の目の前で”開かない以上、どんなに質が良かろうが中身を確認できないなら『否』とするしかねえよ」

つまりは却下であると言いたいらしい。これには創平が珍しく食い下がった。

「仕方ないだろ。俺は詞喰鬼だ。判断できるのは言霊であって、箱じゃない。どんなに小奇麗な箱を出されても、その価値は量りかねる。言葉じゃないからな」

彼の言うことはもつともである。それを理解できるからこそ、創平は納得がいかない。彼が中身を確認しないままに判断を下そうとしているのが許せないらしい。

「開ければ審査してくれるんだな」

「そういうこと。どうやらあのお嬢さんは、この箱を開けられないみたいだったからな。ったく、硝子の匣だなんて、どうしてそんなものに本を詰め込んだんだか」

創平がきょとんとしてしまったので、見兼ねた円が口を開く。

「自分で開けられるなら、とつくに開けてるだろ。あんなに前妻とやらの敵意むき出しなんだからさ」

そうか、と創平は頷いた。それもそうだ。

そつと箱を持ち上げると、くるくると回し六面全てを観察する。

鍵穴らしいものは一切、ない。完璧な六面体だ。

「『玻璃と、意図』　か」

そして、じつと口を閉ざしてしまった。箱を見つめたまま、人形のように固まっている。円がおや、と思う。彼の中で何かがしこりになっているらしい。創平の表情は今にも、「確かあの棚にこういう内容の本があつてだな」と蘊蓄を話し出しそうなほどに神妙な顔つきになっている。これは本気で開ける気だ。

そんなに馬鹿正直にならなくても。円は内心苦笑している。別に円は考えることを放棄した訳ではないのだ。

「『針と糸』、じゃないんだ」

「うん？　どういう意味だ」

「針と糸なら納得するのに、と思って。さっきも言ったけど、為人氏はミステリの第一人者だ。だからトリックの一環として、針と糸なら分かりやすいのになあ、つて。一般的なミステリの手法として、針と糸のトリックはメジャーだからさ。メジャーすぎて、これを使うのはミステリとして非常によろしくない、とされているくらいだ」

つまり創平は掛け言葉にしている意味があるのだろうか、と考えた訳だ。ミステリは専門外、と円は呟く。いい加減その返事にも慣れてしまった創平も、「食わず嫌いはよくない」と口にしたきり、特段これといった態度をとらなかった。

「で？　その針と糸っていうのは、どんなの？」

「密室トリックだよ。例えば、窓枠のどこかに糸を括りつけておいて、外に出てから糸を引く。すると勝手に戸が閉まり、密室ができるだろ。針はその糸を括りつけるのに使う」

「でもそれは、密室ではない」

「そう。だから、このトリックを使った時点で完全密室は成立しなくなる」

創平は箱の枠に触れ、指先でそつとなぞる。まるでひとつの部屋のようだ。硝子の光沢に美化された「不幸」が、不完全の中で今も息を潜めている。己の行動を封じ、あたかも初めから「不幸」がその場にいたかのような。針と糸で密室を作った為人氏の真意は。

「彼が敢えて『不完全』にした理由はなんだろう」

創平はじつと考えている。彼のいいところは、やたらに騒ぎ立てずにじつと考え抜く力があること。悪いところは、その間周りを考えずに黙りこんでしまう、割とマイペースな面があるということだ。こうなったらもう止められないということを円はとてもよく知っている。だから敢えて何も言わず、無造作に畳の上に寝転がったのだった。

さて、創平の頭の中では、ただひとつ、どうしても気にかかることがあった。

先程幸乃が言った、この一言である。

『これは本邸に置いてはならない。幸乃に見せてもいけない。速やかに相応の手段で処分すること』

この言い分からすると、彼女が言うところの「為人が前妻のために書いた本」の定義には当てはまらない。単に、人目につかぬよう処分するよう命じているだけなのだ。おそらく、自分に見せられないもの。すなわち前妻に関わるもの、と彼女は考えたのだろうが、それはあまりに極端だ。きっと、そう思わざるを得ない理由があるのだ。

私が正妻から為人を奪った、ということはご存じ？

彼女の一言が警鐘のように響き渡る。これがしこりの原因なのだ。何度も何度も繰り返し流れる声は、ある瞬間ぴたりと止まる。

「円」

脳内の沈黙に耐えきれず、創平が口を開いた。

「おれは憶測でものを話すのが嫌いだ。でも今、とんでもないこと

を想像してしまった。確率は決して低い訳ではないだろう、と思う」

円は起き上がり、大欠伸をかましながら言う。

「それで？」

「『玻璃と意図』に隠されたものは、“永遠に”密室でなければいけない。そうでなければ、価値がなくなる」

創平は硝子の箱を両手で持ち上げた。そして、そつと蓋を撫で上げる。その箱を心からいとおしむように、指先からこぼれ落ちるのは優しいさだ。

その様子から、円は全てを察したらしい。赤褐色の瞳を細め、うつむく創平の髪に触れた。それは子供をあやす仕草にも似ていた。

「創平。心を痛めるな。“味”に支障が出るだろう」

「わかつてる」

でも、と彼は首を動かし、円の手を払いのける。「でも、そんなこと、あつてもいいのか」

「有りか無ししか答えがないなら、間違いなく有りだ」

円は言う。「お前さあ、その箱を開ける方法、最初から気付いていたんだろ？」

あからさまに創平の目に動揺の色が浮かんだ。本当に、彼は嘘のつけない性質だ。

「なら、どうしてさつさと開けなかった」

「……幸乃さんが『私のためのものではない』と言ったとき、為人氏の死因が自殺だと思い出した。だから、下手に幸乃さんの前で開けるのは危険だと思った。だって、」

「もういい」

円の独特の光彩を放つ瞳が、立ち止まろうとする創平の背中を押そつとする。考えることを止めてはならない。これは義務だ。創平が詞喰鬼と関わりを持った以上、そして、この本と関わりを持った以上。最後まで見届けなくてはならない。

だが、と円は思う。

この男はどこまでも優しいから。まるで、あのひとのように。

「もう開けられるだろ。帷子創平」

問うと、創平はこくりと頷いた。それでいい。

「その本の持つ『不幸』、俺が全部喰ってやる」

創平は、おもむろに箱の側面に力を加えた。かと思うと、箱の側面がぱこんと音を立ててずれたではないか。そう、この箱の仕掛けは、思いの外簡単だったのだった。ある一定の順序で側面をずらしていけば、蓋が開く。よくある仕掛け細工の一種だったのである。

その蓋を開けると、中にはなにやら紙束のようなものが入っている。彼女の言う通り、本当にこの箱は装丁の一部だったのだ。

「いくよ。『詞喰鬼』」

刹那、創平の声に呼応するかのようになり、硝子の箱は青色を帯びた強い閃光を放つ。

4 (完)

創平が手にする硝子の蒔絵から湧き上がる^{はなだ}縹色の光。今にもこぼれ落ちてきそうなほどの勢いで燃える青が、ちりちりと瞳の奥底を刺激する。そこに『美しさ』という言葉は見出せない。薄い氷のような危うさと鋭さを孕んだ、冷たい炎だ。それを、創平は『鬼火』と呼んでいた。

本来鬼火とは、湿地に小雨の降る闇夜などに、空中に燃え出る青火のことを指す。陰火だとか幽霊火だとか狐火だとか火の玉だとか、様々な呼称はあるけれど、この色の特徴から言って一番近いと思われるのが「これ」だった。まあ、そういう観点から言えばこの表現は正しくないのだけれど。

そもそも、少し念じるだけで己の手の中で火が灯るというのは完全なる超常現象である。いくら円が『不幸』を体内に吸収するためになんか己に与えた能力とは言え、人間離れてゆく自分を創平はひどく残念に思う。

もっと、全うに生きるんだった。もう後悔しても遅いが。

「やはり、お前の手の中はよく燃える」

円が炎を覗き込みながら不敵に笑うと、創平は困ったように眉を下げながら微笑んだ。

「褒められたことじゃない」

そして、彼もまた手の中で燃える青の炎に目を向ける。「おれの手の中で言霊が燃えるのは、その言霊はお前が言うところの『不幸』を背負っているからだ。そんな悲しいことがあるか」

「『不幸』の匂いを纏った人間が触媒に……、ね。『彼岸堂』はやたらそういう人間が集まるから」

それじゃあ、と円が胸元で印を結んだ。赤褐色の瞳が青の炎を捉えると、ふわりと炎が箱から離れ、宙に浮かび上がる。火の粉を巻き上げながら移動してゆく様はあたかも彗星のようだ。

そのとき、かたん、と外から物音がした。

創平が身を翻すと、一度閉めたはずの戸が僅かに開いており、その向こうで幸乃が目を丸くしていた。ぎよつと目を剥き、まるで化け物を見たかのような。否、事実上化け物ではあるのだけれど。

「ああ、」

この非現実を受け入れられる人間は、そうそういないだろう。

創平が円に目を向けると、彼は心底どうでもいいといった表情を浮かべている。

「その『ニンゲン』。俺のことは最初から視えていたんだろ。来いよ、まとめて喰ってやる」

それに反応したのは創平の方だ。円がわざと『ニンゲン』と言うのは、彼女の『不幸』そのものに興味を示していることの暗示である。ああ、と創平は新たな問題に頭を悩ませる羽目になった。また、始末書を書かなくてはいけないのかと思うと涙が出てくる。

幸乃が助けを請うように創平を見た。その瞳にはうっすらと涙が溜まっている。

「あ、あなたたち……」

おに、と声にならない声が彼女の口から洩れる。創平はゆっくりと膝をついて座り、幸乃に言い聞かせた。できるだけ優しい声色で、彼女をむやみに刺激しないよう細心の注意を払いながら。

「あっちは鬼ですが、私は違います」

「でも、喰うって……！」

「ええ、だから」

創平はにこりと笑う。「あなたの『不幸』をね」

そして、己が左腕に身につけていた無骨な腕時計を外した。時計はスーツのポケットに突っ込んで、残った左手で幸乃の震える右手を握る。彼女の唇から空気が洩れた。その瞳が向けられているのは、まさしく創平の左手首だ。

彼の左手首　時計の下に隠されていたのは、鎖模様の痣。それが『鬼火』同様に縹色の光を放つ。

「円」

やれ、と創平がいつになく冷たい口調で吐き捨てた。振り向かなくても分かる。円は静かに頷いて、再び印を結び直すのだ。

それは祈りの姿にも似ている。行き場を失った『不幸』の炎を、そして人間の思考にこびりついて離れない『不幸』を、全てを代わりに背負うための。

そして願う。

再び『不幸』に取り憑かれることのないように、と。

円が何かを呟いた。それは音だった。人間が決して口にすることのできない、発音できない音。それが聞こえた刹那、創平の身体は重力に引きつけられたかのようにずっしりと重くなる。息苦しい。

顔をしかめながら横目で幸乃の様子を確認すると、彼女にはさほど負担がないようで、ただただ呆然と宙に浮かび上がる炎を見つめている。よかった、と創平は頭の片隅で思った。先述の通り、詞喰鬼が人間の頭から言霊を喰らう時強烈な快感に襲われる。だが、言霊ではなく人間に沁みついてしまった性質を喰らおうとすれば、耐えがたい苦痛に侵されるのである。円と直接契約関係にある創平が幸乃に触れていることで、彼女にかかる負担を肩替りしているのだ。幸い、言霊を喰らわれるよりは充分に耐えられる程度の苦痛だ。創平は歯を食いしばり、早く円が事を済ませてくれるように願う。

浮かび上がる『鬼火』が、円を囲うように漂い始める。その周りには、黒い色をした霧のようなものがまとわりついていた。霧は幸乃の身体から噴き出している「もの」である。円はそれをしばらく観察し、ふうん、と呟いた。

そして思う。

この女が持っているものは『不幸』じゃねえな、と。

まあ、一度喰うと決めてしまったので今更拒否できないが。

口を僅かに開け、舌先で『鬼火』をなぞる。氷の冷たさが舌先の感覚を麻痺させる。この痛みが堪らなく好きだ。舐めて噛み付いて切り裂いたら、どれだけ美味しい蜜が出るのだろう。

人の『不幸』は、蜜の味。

言い得て妙だ。ふふ、と円が笑う。

「だから好きなんだよ。お前ら『ニンゲン』がさあ」

十

テール・ランプは鋭い光を以て闇を一掃する。等間隔に立ち並ぶ街灯のうち、二つに一つは球切れで、ほとんどその意味をなさない。この街は闇に包囲されていた。

まだだるい身体に鞭打って、創平は淡々と車を走らせていた。助手席には円が座っており、少々不機嫌そうな顔で真正面を睨めつけていた。機嫌が悪い理由も分かるけれど。創平は小さく息を吐いた。結論から言うと、円は『玻璃と意図』に込められた『不幸』、それから幸乃にこびりついていていた『不幸ではないもの』の両方をかつくらって帰ってきた。その『不幸でないもの』がものすごく不味かったそうで、それが彼を苛立たせているのだった。

あの後　円が食事を終えた後、幸乃は創平に泣きながら許しを求めた。『不幸でないもの』を喰われたあとの彼女はまるで憑き物が落ちたようだった。それくらい、彼女が持ち合わせていた雰囲気が変わってしまったのである。今の彼女には、少なくとも前の彼女が持っていた妖しさは全くと言っていいほど感じられない。

為人氏の遺作『玻璃と意図』。創平は見ない方がいいと前置きしたのだが、幸乃はそれをどうしても見たいと言って聞かなかった。それを見ることは、確かに為人氏の遺言を守らなかったことにはなるのだが、どうしても最後にひとつだけ確かめておきたいことがある。幸乃の熱意に負けて、創平はしぶしぶ硝子の箱の中身を彼女に手渡したのだった。

その中身は随分分厚い仮綴じにされた本で、為人氏がわざわざ自筆でしたためたものらしい。彼女はそれをゆつくりと、一頁ずつ丁寧に読んでいく。創平は内心彼女が発狂するんじゃないかとひやひ

やしていたが、そんなことはなかった。むしろその逆で、彼女は随分すつきりとした表情で一言だけ呟く。

やはりあの人は、私を愛してなどいなかった。

その仮綴じにされた本の内容は全て、前妻に捧ぐ手紙だった。

幸乃は彼女自身が言う通り、前妻から為人氏を寝取っていた。彼も確かにそれなりに愛してくれ、彼女はそれで満たされていた。だが、いざ結婚してみても痛感したことがある。為人は、自分よりも前妻の方を今も愛しているのだ、と。

さすがに初めはただの被害妄想だと思っていた。だが、あるとき彼女は郵便受けに一通の手紙が入っていることに気が付いた。為人氏に宛てた手紙。そしてその送り主は、あの前妻だった。幸乃は為人氏に手紙を渡さず、こっそりと自室で開いてしまった。その内容から察するに、為人と前妻は今も時々会い、会えないときはこのように手紙を交わしているらしい。今まで幸乃がそれに気が付かなかったのは、普段為人氏が自ら郵便受けを開けているから。今日はたまたま彼が外出中だったために幸乃が開けてしまったのだが、それが運の尽きというやつだった。幸乃はその手紙を庭先で燃やした。妬ましかったのだ。前妻から為人氏の全てを奪ったと思っていたのに、実際はそうではなかった。奪えたものは、為人氏の妻という肩書だけ。その肩書に執着し、手に入れたことで満足していた自分はなんと愚かだったのだろう。

それ以降、幸乃は為人に先回りをし、届いた手紙を回収しては全てを燃やしていた。為人氏はそれに対しなんとも思っていないかったようだが、次第に不審に思い始めたのか、ある日幸乃を問い詰めた。幸乃は知らん顔をしてその場を切り抜けたが、為人氏の疑念は留まることを知らない。使用人に内密に話をつけ、幸乃を監視させていたのだそう。いつも誰かから見られている。これではまるで囚人ではないか。確かに自分は無断で手紙を燃やしたが、向こうにも非があるではないか。日に日にエスカレートしてゆく監視。自由など一切ない。彼女はそのストレスに耐えきれなくなった。

だから

殺したのです、と彼女は言った。

全てを終わらせるために。妻という肩書きに執着している自分に心底嫌気がさしていたけれど、それを今更捨てる訳にもいかなかった。これは彼女の意地だった。例えばそれが社会的に認められないことであろうとも、そうせざるを得なかった。彼女はこのときから、『不幸でないもの』に取り憑かれていた。

その名は『愛憎』。

彼を自殺に見せかけるのは本当に簡単だったという。なにせ、彼はミステリ作家の大御所だ。どうすれば他人に殺人だと気がつかれてしまうか、とてもよく知っていた。そして、その逆も。こういう類の話は常日頃聞かされていたので、苦勞することはなかった。為人氏からすれば、まさか自分の考えた方法で殺されるなどとは考えてもみなかっただろう。

この後、彼女は自首すると言って微笑んだ。

ありがとう。……そこにいらっしやる鬼さんにも、どうぞよろしくお伝えください。

「『玻璃と意図』、か」

彼女の言葉を回想していると、円が突然口を開いた。

「うん？」

まだ運転中なので、創平は返事だけしてその意味を確かめようとする。

「どうして、そんなものを遺作として残したんだろうな、って。遺言に残すくらい重要だったんじゃないのか」

創平は頷いた。疲れたから停めるよ、と断りを入れ、徐々にブレーキをかけてゆく。

「彼女のことが、大事だったから隠したんだろうな」

車はゆっくりと減速し、路肩で停止した。エンジンを切ると、辺りはしんとした静寂に包まれる。

「為人氏は、自分の気持ちを殺したんだろ。前妻への未練を手紙に

残して。硝子の箱に閉じ込めて、小さな密室なんか作ってさ。いずれ幸乃さんにも見つかるとは思っていたけれど、そうする必要があった。トリックも犯人もバレバレ。こんなものを、いつまでも家には置いておきたくないだろ。だって彼はミステリ作家だ。不完全なものは、プライドとして許せなかった。そんな醜い『死体』、彼女には見せるべきではない」

円が口を開く。

「だから人間は面倒なんだよ。本当に」

それにしても、と創平はスーツのポケットから携帯電話を取り出し、開いた状態で頭を抱えた。眉間に皺を寄せた表情がディスプレイの明かりに照らされて、ぼうつと浮かびあがっている。

「篠宮さんになんて説明しよう。また妙なことに巻き込まれて、拳句本の回収はできなかつただなんて言ったら……」

「あいつの言葉を借りれば、『おしおき』だな」

円がやたらあつさりとした口調で言うものだから、創平はつい篠宮がそう言い出す様を想像して、一人青くなっている。悪い人ではない、むしろいい人なのだが、怒った篠宮は言葉にできないくらいに恐いのだ。

「言えない……言えないけど、言わなければそれはそれで恐い」

「創平。だからあの男は駄目だと言っただろ」

「だって」

そこまで言いかけて、創平は次の言葉を飲み込んだ。円の視線が、強く何かを訴えていたからだ。その視線が言わんとしていることは何となくだが想像がつく。ただでさえ、彼は今機嫌が悪いのだ。

外に人気はない。暗闇に塗りつぶされた円の表情。ヘッドライトの明るさのおかげでうつすらと見える彼の表情が、少々怒って見えた。

「……まさかとは思うけど、妬いてるのか」

ここまでくると、創平の鈍感さは天下一品である。

呆れられるかと思いきや、ぴくりと整った眉の端が震えたくらい

で、円は表情を崩さなかった。彼がこんなに真面目な表情をしているのは本当に珍しい。

「ああ、妬いてるよ」

そして、異常なまでに素直なところも。

円の両手が伸び、創平の肩を掴む。右手が頬に伸び、するりと撫でると創平はすっかり気が動転してしまったようだ。顔を右に背け必死に抵抗するも、詞喰鬼は先述の通り力が強い。増して超絶インドアタイプの創平には勝てる要素がまるっきり、ない。

「まど、かつ」

駄目だ、と声を絞り出す。その様子ににこりと微笑んだ円、愉しげに滑らせた指を顎元へ持っていく。ついと上を向かせると、彼の表情は羞恥にも似た歪みを浮かべていた。円が好きな表情のひとつだ。

あまりに可愛いのでこのまま喰ってやろうか、と思った刹那。

創平の携帯電話が鳴った。

一瞬見せた隙に、創平の右手が動いた。次の瞬間には円の左頬に平手打ちが命中し、乾いた音が車内に響き渡る。この絶妙なタイミングで電話をかけてくる人物は、円が知る中では一人しか知らない。両手で円を押しつけた創平は携帯電話の通話ボタンを押し、動揺を隠すためにわざとらしくへらへらと笑いながら応対を始めている。

「あっ、し、篠宮さん！」

やはりか。

叩かれた頬を擦りながら小さく舌打ちする円を完全無視しつつ、創平はひたすら電話越しに平謝りに謝るのだった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9743n/>

玻璃と意図 彼岸堂図書館目録

2010年11月18日22時40分発行